

「ただ、信じなさい」

(マルコによる福音書5:22-24,35b-43)

誰もが「もう終わりだ」と思ったヤイロの娘に、命が与えられました。先週の福音では、主イエスが荒れ狂う風を叱り、湖に向かって「黙れ。静まれ」と言われると、風は止み、すっかり凧になりました。そのことから、主イエスの背後にはいつも神がおられ、神は自然を治めることをわたしたちは示されました。そして、イエスは言われました。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」この言葉を心に反響させながら今日の福音を聴くと、より一層今日の主イエスの言葉が深く沁みてきます。

今週も先週に続き、奇跡の話です。人間にとって死は終わりや絶望の象徴です。神は死をも支配する、ということが今日の福音では示されます。このことは何よりも主イエスの復活によって示されることですが、人の目にはもう終わりだ、と思われることであっても、神にはそうではない、ということです。「もう、おしまいだ」という人間に、「タリタクム、起きなさい」と主イエスは語りかけ、「その先」へと導かれるのです。そのことを「ただ、信じなさい」と主イエスは言われます。わたしたちの目には「死んでいる」ように見えても、神が共におられる主イエスにとっては、「寝ているだけ」なのです。「命」をも神が治めることを、主イエスは知っており、信じているからです。この「ただ、信じなさい」

という言葉こそ、先週の福音の最後の「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」という主イエスの言葉と呼応しています。嵐を静めた神の力は、命をも支配します。人は時に、「これは神でも無理だろう」「神とて、死には勝てないだろう」という思うものです。ことに、苦しみや困難の中ではなおさらそう感じるでしょう。そのような時には、どのような説明も慰めの言葉も、力を持ちません。だからこそ、主イエスは端的に、「タリタクム、起きなさい」「ただ、信じなさい」とだけ語るのです。絶望の中でできうることは、ただすべてを治める神に頼るしか無いからです。しかしそこにこそ、絶望の先、「もう終わりだ」の先の希望の光が、わずかにも差し込むのです。なぜなら、「これは神でも無理だろう」「神とて、死にはさすがに勝てないだろう」という呼吸もできぬほど隙間のないところに、例外無き神の思い、つまり自分の中からは生まれることない神からの「可能性」が与えられるからです。神は例外なく、死を超えて、人を命の方へ、希望の方へと導く方であることを「ただ、信じる」道がそこから広がります。

信じることが出来なかった人々への主イエスの要求はとてもシンプルなものです。「信じなさい」。先週の福音では、弟子たちは「恐れ」ゆえに信じることが出来ませんでした。彼らはこれまでも、奇跡を見てきたし、教えも聞いていました。しかし、そんな弟子たちであっても、嵐を静める主イエスに恐れをいただき、「いったい、この方は何者なのだろう」という疑問を与えられました。自分

の了解可能な範囲で主イエスを捉えよう、またその背後にいつもおられる神を捉えようとしても、それは出来ません。神はわたしたちの想像や了解可能な範囲に収められるほど小さくないからです。だからこそ、旧約聖書では神に名前をつけることを禁じています。名前をつけた途端、神を名前の中に閉じ込め、自分の了解可能な範囲に引き下ろしてしまうからです。その神はもはや神ではなく偶像です。そうしないために、旧約聖書では、たとえば「熱情の神」などのように、「形容詞」によってのみ呼ばれます。そしてそのパターンは500以上にも及びます。それほどに、神は人間には捉えきれるものではない、ということです。今日の福音では、人々は「死」という現実には直面しています。死こそ、人間の了解可能な範囲外へと、身近な人が行ってしまう出来事です。だからこそ、人はその人との永遠の別離を感じ、深い喪失感に支配され、まして復活などということ信じることなど到底出来なくなってしまう。わたしたち人間はどうしても、分かる範囲、想像できる範囲の中でしか、「信じる」ことが出来ないのです。しかし、わたしたちはあらためて立ち返りたいと思うのです。神を自分の了解可能な範囲に収めるのではなく、分かり得ないものとして、しかし必ずわたしたちに「命」を、「希望」を与えてくださる愛の神であることに立ち返りたいのです。神は時に人知を遥かに超えた方法によって、わたしたちを愛によって生かしてください。

人間の「枠」に収まらない神との出会いは、愛の実践の中でも見いだされたことでしょう。今日の旧約ではこのような一節がありました。「この国から貧しい者がいなくなることはないであろう。それゆえ、わたしはあなたに命じる。この国に住む同胞のうち、生活に苦しむ貧しい者に手を大きく開きなさい。」（申命記15:11）申命記は、40年荒野をさまよったイスラエルが、いよいよイスラエルの地に再び入る時に、これからの日々、神から離れることがないように、またその地でイスラエルの民が平和に暮らせるようにと、再び律法が明示された書物です。ですから、この一文もまた、人間が平和に生きるための神からの大切なメッセージです。たしかに貧しい者がいなくなることはないかもしれない。しかし、あなたがたは助け合わなければならない。自分のものを握りしめるのではなく、大きく手を開くところに、他者との本当の平和が訪れる、ということを示しています。そのことを、今日の使徒書のコリントの信徒への手紙では次のように言い換えていると言えるでしょう。「あなたがたの現在のゆとりが彼らの欠乏を補えば、いつか彼らのゆとりもあなたがたの欠乏を補うことになり、こうして釣り合いがとれるのです。」東京聖テモテ教会のみならず、大いなる教会の歴史はまさに、これらのみ言葉が示す実践、すなわち自らだけのために手を握りしめるのではなく、他者と共に生きるために「手を大きく開く」ところにこそ、まことの平和が訪れることを経験してきました。この事実もまた、わたしたちが「自分の範

困、粹」を超えて、神に信頼することにこそ道が開かれることを示しています。

たとえばわたしたちは自分のため、また肉の家族のためにばかり財産を握りしめることが良しとされている世界に生きています。しかし、その世界にありながら、そうではなく手を開いて分かち合う世界に生きようとするところにおいてこそ、神を知る、真の平和を実現する道が開かれるのです。そしてその実践においてこそ、わたしたちは神と出会い、死をも超えた希望をいただくことができます。

神が望まれるのは、主イエスがそうであったように、いつも神を見つめることです。自分の了解可能な範囲、自分の限界の内に神を収めるのではなく、神の偉大さにこそ自分を委ねることです。つまり、「ただ、信じなさい」ということです。死者をも生き返らせる神には、必ず希望があります。その神様を見つめ、神様にある希望、喜びに生きること。その神にある喜びを生きる命は必ず輝きます。なぜなら、希望に照らされているからです。この世の命が暗闇にあるとき、絶望に支配されそうな時にも、その命の輝きがこの世を照らします。神を見つめ、命を輝かせ、この世を照らす。皆が、互いが輝きを持ち寄れば、この世の闇は消し去るのです。これがわたしたちの使命です。

先人たちがそうであったように、どんな苦難にあっても「ただ、信じなさい」と言われる主イエスの言葉を信じ、「信じます」と答えて歩んでまいりましょう。

そしてあらためて今日、召されて主イエスのみあとに従ってきた先人たちの信仰に照らされ、わたしたちも神を見つめ、信仰の歩みを新たにしましょう。わたしたちを呼び集めてくださっている神の絶えることのない希望に照らされながら歩んでまいりましょう。